

2022年3月20日高知教会礼拝

松浦伝道師

説教:「過ぎ越しの食事」

聖書: ルカによる福音書22章1-13節

○はじめに

本日はルカによる福音書22章1～13節に示されています神様の御言葉に聞きたいと思えます。さて、ルカによる福音書はこの22章からいよいよ、イエス様の受難、つまり、イエス様が十字架へと向かわれる話になります。これまで順を追ってルカによる福音書を読み進めていたのですが、エルサレム入城からの一週間という受難の日々を送るイエス様の個所を読んでいきます。今、私たちは教会歴で言うと、レント(受難節)の時を過ごしています。ですので、まさに、ぴったりの聖書の個所が今日の礼拝で与えられました。

○民衆を恐れていた宗教的指導者

今日の聖書の個所は非常に恐ろしい場面と言いますか、緊迫した状況が丁寧に説明されています。2節に、祭司長たちや律法学者たちが、イエス様を殺そうと考えていたとあります。私たちはそのことは既に、これまでも繰り返し語られていました。例えば19章にありました、エルサレム神殿に入ったイエス様がその境内で商売をしていた人々を追い出したという宮清めの出来事においても、祭司長、律法学者、民の指導者たちがイエスを殺そうと謀ったとありました。ユダヤ人の指導者たちの間には、イエス様に対する殺意がふくれあがっていたのです。しかし、それを実行に移すことはなかなかできずにいました。本日の2節に「イエスを殺すにはどうしたらよいかと考えていた」ありますが、それは、殺したいのだがどうしたらよいのか、なかなかそれを実行に移す機会がなくて困っていた、ということです。

なぜそれを実行できなかったのか、その理由は「彼らは民衆を恐れていたのである」と2節の後半に書かれている通りです。イエス様の話は毎日、喜んで聞いていた民衆を恐れるがゆえに、彼らはイエス様に手を出すことができなかったのです。「イエスを殺そうと謀ったが、どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである」と19章でも説明がありました。つまり、イエス様は民衆に人気があったのです。民衆は皆、イエス様の話を知ろうとして、エルサレム神殿の境内にいるイエス様のもとに朝早くから集まっていたのです。

エルサレムに入城されたイエス様は、毎日神殿の境内で教えておられました。そこは祭司長、律法学者ら、イエス様を殺そうと思っている人々の本拠地でもあります。聖書を読んでいる私たちは、なぜイエス様はそんな所でわざわざ、と思ったりもしますが、しかしそこは同時に多くの民衆が集まる所であり、その人々が喜んでイエス様の話を知っている限り彼らも手を出せない、そういう意味では最も安全な場所でもあったのです。何よりも、エルサレム神殿は父なる神さまを礼拝する場所であり、ユダヤ人の心のよりどころです。そんな

礼拝をする場所で、イエス様を捕え、民衆の前でイエス様を殺害することを実行することなど、できる雰囲気ではなかったのだと思います。民衆の支持を失うことを恐れている宗教的指導者たちは、民衆と同じように話を聞いているふりをしながら、心の中は穏やかではありませんでした。

○イスカリオテのユダ

そういうイエス様のエルサレム神殿での状況を踏まえたうえで、続く3節を読みますと、「しかし」という言葉から始まっている事の意味が明確になるのではないのでしょうか。「しかし、12人の中の1人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った」イエス様をどうやって捕えたらよいか・考えあぐねていた祭司長や神殿守衛長のもとに、イエス様の十二人の弟子の一人であった、イスカリオテと呼ばれるユダが行って、イエス様を彼らに引き渡す相談をもちかけたのです。

それは6節にあるように、「群衆のいないときにイエスを引き渡そう」という相談です。彼らは喜んで、この裏切り者のユダにお金を与えることに決めました。イエス様の側近であるユダの手引きがあれば、民衆の見ていない所でイエスを捕えることができる、そして捕えて、すぐにユダヤの国を支配していたローマ帝国の総督ピラトに引き渡してしまえば、後はピラトがローマの権力によってイエス様を殺してくれるだろう、かねてから願っていたながら実現できずにいたイエス様の抹殺がこれによって可能になる、と彼らは喜びました。このように、弟子の一人であるユダの裏切りによって、イエス様の十字架という出来事が実際に計画され実行されてしまう事になりました。

○過越祭と除酵祭

そのようにイエス様の受難の話に具体的に入っていくのに際して、ルカ福音書を書いたルカが22章1節で短く確認しているのは、「過越祭と言われている除酵祭が近づいていた」ということです。この祭りが近づいてくると共に、イエス様の受難への動きが加速していったことを、これはルカ福音書だけではなく、他の福音書も皆語っています。イエス様の十字架の死は、過越祭ないし除酵祭の時に起ったのです。これは単にそういう時期に起ったという季節感を示すための記述ではありません。この祭りの持っている意味が、イエス様の受難、十字架の死と深く結びついています。それを知るために私たちは先ずここで、「過越祭と言われている除酵祭」という祭りについて確認しておきたいと思います。

この祭りが行われるようになった起源とその意味を語られているのが、旧約聖書の箇所である、「出エジプト記」です。今私が聖書研究祈禱会を担当する時は、出エジプト記を章を追って読み進めています。ちょうど今週も私の担当で、出エジプト記の20章を読みます。神様たモーセを通してイスラエルの民に十戒を与える箇所です。祈禱会ではすでに、過ぎ越しの出来事と、過ぎ越しの食事の規定を出エジプト記の12章から学びました。出エジプト記12章2節にこうあります。「この月をあなたたちの正月とし、年の初めの月としなさい」。つまり過越祭ないし除酵祭が行われるこの月が、イスラエルの民の新年、正月と定められ

たのです。それは、イスラエルの民が新しく歩み出す、という重大な出来事がこの月に起ったからです。その重大な出来事とは、それまで奴隷として苦しめられていたエジプトからの解放です。出エジプト記はその出来事を語っているのです。主なる神様によって遣わされたモーセは、主なる神様がエジプトに下す数々の災いを告げ、イスラエルの民の解放を要求しました。しかしエジプト王ファラオはなかなか解放を認めませんでした。最後に行われたみ業、このことによってイスラエルの民はエジプトの奴隷状態から解放された、その決定的なみ業がこの12章に語られているのです。

そのみ業とは、エジプト中の初子、最初に生まれた男の子を、人も家畜も含めて、神様が全て撃ち殺すということです。それまで様々な災いを体験しても頑なにイスラエルの解放を拒んでいたファラオも、この決定的な災いによってついに屈服したのです。そしてこの恐ろしいみ業を行なうに際して主なる神様は、イスラエルの民に、それぞれの家で小羊を屠り、その血を家の入り口の柱と鴨居に塗るようにお命じになりました。その血の印がイスラエルの民の家の目印となって、神様はその家を何もせずに通ら過ぎたのです。そのようにして、エジプトの全ての初子が撃ち殺されたのに、イスラエルの民の中には一人も死んだ者はいなかったのです。この出来事によって、イスラエルの民のエジプトからの解放が実現したのです。

小羊の血のしるしによって神様がイスラエルの民の家を通ら過ぎる、それが「過越」です。そのことによってエジプトの奴隷状態からの解放という救いが与えられたことを記念して、この月がイスラエルの正月と定められ、「過越祭」を行うことが定められたのです。そこでは、小羊が屠られ、その血が家の入り口の柱と鴨居に塗られます。そしてその小羊の肉と、その他いくつかここに定められているものを、家族みんなで食べる、それが「過越の食事」です。この過越の食事を共に食べることによって、主なる神様の偉大なみ業によってエジプトの奴隷状態から解放された、その救いを思い起こし、感謝し、主なる神様の民としての自覚を深める、それが過越祭です。

そしてその過越祭は除酵祭をも伴うものであることがやはり出エジプト記12章に語られています。過越祭から七日の間、酵母を入れないパンを食べるのが除酵祭です。なぜ酵母を入れないパンを食べるのでしょうか。出エジプト記12章の39節にこのように説明されています。「彼らはエジプトから持ち出した練り粉で、酵母を入れないパン菓子焼いた。練り粉には酵母が入っていなかった。彼らがエジプトから追放されたとき、ぐずぐずしていることはできなかつたし、道中の食糧を用意するいとまもなかつたからである」。

過越の出来事によって恐れを抱いたファラオは、イスラエルの民を解放すると言うよりもむしろエジプトから追放したのです。そのために彼らは急いで出発しなければならなかつた、酵母を入れてパンを発酵させている時間がなかつたのです。そのことを記念し忘れないために酵母を入れないパンを食べるのです。当時の時代のパンの焼き方には今と違う特徴がありました。現在は小麦粉を水で練ってそこにイースト菌などの酵母菌を直接入れて、パンが発酵するのを何時間か待ちます。イスラエルの民はどのようにパンを発酵していたのかと言いますと。公募によって膨らんだパンの一部を古いパンだねとして取り分けてお

いて、新しくパンをこねるときにこの古いパンだねを混ぜてパンを発酵させていました。出エジプトという恵みは神様の恵みが新たにされるイメージです。古いパンだねをエジプトからわざわざ持たずに、旅に出るという新しい恵みに生きるイスラエルの信仰の歩みをも連想させると言えます。ですから除酵祭も、過越祭と同じく、主なる神様によるエジプトの奴隷状態からの解放を記念し、感謝し、その救いを与えて下さった主なる神様の民としての自覚を深めるために行われるのであり、この二つの祭は密接に結びついている大切なユダヤの祭りなのです。

○イエス様こそ、過越の小羊

この過越祭と除酵祭が、主イエス・キリストの十字架の死とどのように結びついているのか、そのことは、イエス様が弟子たちと過越の食事を共になさったことを語っているこの後の所、14節以下を読むことによって、はっきりと示されていきます。結論から言えば、イエス様こそ、私たちのために屠られた過越の小羊であられる、ということです。過越の小羊は、イスラエルの民がエジプトから解放され、神様の民として新しく生き始めるために犠牲となって殺されます。この小羊の死によって、神様による救いのみ業が実現するのです。

それは主イエス・キリストの十字架の死によって、罪の奴隷であった私たちが解放され、救われたことと重なります。私たちは生まれつき罪に支配され、その奴隷となっている者です。生まれつきの人間は決して自由な者ではありません。罪の支配は巧妙であって、私たちに、自分が自由な者であり自分の力で生きているかのように思い込ませているのです。自由な者だと錯覚している私たちは、私たちに命を与え、様々な賜物を与えて養い導いておられる神様のことを見つめることなく、感謝することも、まして従うこともなく生きているのです。その結果、自由だと思っている私たちが、実は神様に背き逆らう罪が支配しています。その罪の支配の現れとして私たちは、神様が共に生きるべき者として与えて下さっている隣人を、愛し、受け入れ、良い関係を築いていくことができず、憎しみの思いを抱き、心ない言葉をはき、傷つけ、苦しめるようなことばかりをしてしまうのです。そこに、私たちが罪に支配され、その奴隷となってしまっている現実があります。

そして私たちはその罪の奴隷状態から、自分の力で抜け出すことができません。そもそも自分が罪の奴隷になっていることに気付くことすらなかなかできないのです。イスラエルの民がエジプトの支配から自らを解放することができなかつたように、罪の支配は私たちががんじがらめに縛り付けています。そこからの解放は、神様の力、み業によってしか実現しないのです。そのために神様は、独り子イエス・キリストを遣わして下さいました。まことの神であるイエス様が、私たちと同じ人間となって下さり、私たちの全ての罪を引き受け、背負って、十字架にかかって死んで下さったのです。イスラエルの民の初子の代わりに過越の小羊が死んだように、主イエス・キリストが私たちの身代わりになって死んで下さったのです。このイエス様の十字架の死によって、私たちの過越が実現し、罪の奴隷状態からの解放、罪の赦しの恵みが神様によって与えられたのです。イスラエルの民がエジプトの奴隷状態から解放された、過越の出来事を中心とするその救いは、主イエス・キリストによ

って私たちが罪の奴隷状態から解放され、赦しを与えられる、その救いを先取りし、予告し、指し示していたのです。

○過ぎ越しの祭りの中で十字架にかかる

イエス様の十字架の死が、過越祭ないし除酵祭の時に起ったということは、大変意味深いことです。イスラエルの民は、過越祭、除酵祭を守りつつ、主なる神様によるこの救いの出来事を記念し、感謝し、それにあずかる民として歩んできました。これらの祭が先取りし、予告し、指し示していた救いが、イエス様の十字架によってこそ実現、完成したのです。それゆえに、イエス様の十字架は、過越祭、除酵祭の時にこそ起るべきことだったのです。祭司長や律法学者たちは、なんとかしてイエス様を殺してしまおうと思っていましたが、民衆を恐れていたので手が出せませんでした。過越祭、除酵祭の時というのは、多くの民衆がエルサレムに集まって来る時です。だからこの祭の間はまずい、それが終わってから何とかしよう、と彼らは考えていたのです。

そのことはマタイ、マルコ福音書にははっきり語られています。ルカには彼らのそういう言葉は出てきませんが、「彼らは民衆を恐れていたのである」ということから必然的に出てくるのは、過越祭、除酵祭が終わったら、ということなのです。それゆえに、3節の「しかし」が大きな意味を持っています。ユダが手引きを申し出たことによって、民衆の見ていない所でイエスを捕える可能性が生まれたのです。その結果、この祭のさなかに、イエス様の十字架の死が実現していったのです。イエス様の十字架は祭司長や律法学者たちの思いの実現でしたが、しかし彼らのもともとの思いにおいては、それは過越祭、除酵祭の後に起るべきことだったのです。ところが、彼らの思いに反してと言うか、思いがけない仕方で、この祭の間にそれが実現することになったのです。

○サタンの策略

そのきっかけを作ったのがイスカリオテと呼ばれるユダでした。ユダの裏切りによって、イエス様は過越祭、除酵祭のさなかに十字架につけられることになったのです。このユダは聖書を読む人々の間で様々な興味を引き起こしてきました。ユダについて語っている書物は大変多く、他のどの弟子よりも関心を持たれていると言ってもよいでしょう。ユダはなぜイエス様を裏切ったのか、その思いは何だったのか、ということから始まり、先ほど申しましたことからすれば、ユダの裏切りによってイエス様が過越祭、除酵祭の間に十字架につけられるという意味深い出来事が実現したのだから、ユダはむしろ救いの出来事のための功労者ではないか、という問いも生じます。

後には「ユダの福音書」というのも書かれて、ユダこそ実はイエス様の最も信頼していた弟子であり、イエス様がユダに命じて自分を裏切らせ、十字架の死が実現するようになったのだ、ということが語られたりもしました。しかし教会が正典として受け入れた文書、つまり私たちが「聖書」として読んでいる諸文書においては、ユダのことは大変控え目にしか語られていません。つまり聖書は、ユダのことにそう深い関心を寄せてはいないのです。ルカはこの福音書の続きである使徒言行録の第1章で、ユダの悲惨な死を語っていますが、それだけです。

つまりルカは、ユダがイエス様を裏切り、その報酬として金を受け取り、最後は悲惨な死を遂げた、ということのみを語っているのです。そのような控え目な語り方の中で、ひときわ目立っている言葉が3節にあります。「しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った」。この「ユダの中にサタンが入った」ということは、ルカのみが語っているのです。この言葉によってルカは何を見つめているのでしょうか。それは、ユダの裏切りはサタン、悪魔の働きによって起ったということです。ユダの裏切りは、彼が金目当てに人を裏切る極悪人だったとか、イエス様に恨みを抱いていたとか、あるいはむしろイエス様がローマの支配からイスラエルの民を解放する救い主として立ち上がるのを促すために裏切ったのだとか、そういうユダの心の中の思いによってではなく、サタンの力、働きによって起ったのだ、ということです。そういう意味ではそれはユダでなくてペトロでもヨハネでもよかったのだと言えるでしょう。

つまり、私たちの誰にでもユダと同じことが起るといえることです。ユダのことを特別な悪人と考えてしまうことは、自分はユダほどの悪人ではない、という根拠のない安心感につながりかねません。しかしそれは違うのです。私たちの誰もが、サタンに支配されてイエス様を裏切る者となり得るのです。ルカは一方でそういうことを語ろうとしているのだと思います。しかし他方このことは、サタン、悪魔の力によって、あろうことか十二人の弟子の中から裏切る者が出て、イエス様が捕えられ、十字架にかけられて殺されてしまった、その悪魔の支配の現実の中で、イエス様が私たちのための過越の小羊として、まさにその過越祭、除酵祭のさなかに死んで下さるといふ救いのみ業が実現した、ということでもあります。神様の救いのご計画が、サタンの思い、力、策略をも用いて実現している、そのことをルカは語ろうとしているのです。

○過越の食事を準備する

7節以下には、イエス様がペトロとヨハネとを遣わして、過越の食事の準備をさせたことが語られています。「どこに用意いたしましょうか」と問うた彼らにイエス様は、「都に入ると、水がめを運んでいる男に出会う。その人が入る家までついて行き、家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「弟子たちと一緒に過越の食事をする部屋はどこか」とあなたに言っています。』すると、席の整った二階の広間を見せてくれるから、そこに準備をしておきなさい」とおっしゃったのです。二人が行ってみるとイエス様のおっしゃった通りのことが起ったと語られています。

この箇所をどう読むかはいろいろと説があって、これをイエス様による一つの奇跡として読む人もいます。しかし必ずしもそのように考える必要はありません。イエス様が前もってこの家の主人に連絡してあって、二階の広間を確保しておられた、その家へと弟子たちを案内する人の目印が水がめを運んでいる男だ、という取り決めがなされていた、と考えるも差し支えないのです。大事なことは、イエス様ご自身が、弟子たちと過越の食事を共にすることを願い、そのことを、奇跡によってであれ、事前の打ち合わせによってであれ、実行なされたということです。この食事を準備したのはペトロとヨハネですが、この過越の食事はイエス様ご自身が弟子たちを招いてあずからせて下さったものだったのです。

○過越の食事にいま私達も招かれている

祭司長や律法学者たちの殺意や、イエス様を支持する民衆を恐れる思いをはるかに超えて、また弟子たちの中の一人を裏切らせるというサタンの残酷な意図と力をも用いて、神様は主イエス・キリストが過越祭、除酵祭のさなかに十字架につけられて死ぬという救いの出来事を実現しようとしておられます。それによって、これらの祭が先取りし、予告し、指し示していた救いを実現しようとしておられるのです。この父なる神様の救いのご計画が前進していく中で、イエス様ご自身も、過越の食事を用意してそこに弟子たちを招いて下さっています。その食事において、これは次回の礼拝の場所で読むわけですが、過越の小羊として十字架にかかって死んで下さったイエス様の救いにあずかり、また過越の小羊として流して下さったイエス様の血によって神様が結んで下さる新しい契約にあずかるための聖餐を定めて下さったのです。

この聖餐の起原は、イエス様が弟子たちを招いてあずからせて下さった過越の食事にあります。イエス様は私たちのためにこの聖餐の食卓を整え、招いて下さっているのです。イエス様の招きに応じて洗礼を受け、聖餐にあずかりつつ生きるところにこそ、イエス様の十字架の死によって罪を赦され、その支配から解放されて、神様を愛し、そして隣人を愛して生きる道が開かれていくのです。イースター(4月17日)はもうすぐです。イエス様の十字架での受難を思う時に、私たちは目をふさぎたくなるような思いがいたしますが、十字架にかけられるその前夜にイエス様は、弟子たちと共に、父なる神さまの御業を覚えて過ぎ越しの食卓を持つとされたのです。そして、きょう聖書の言葉を読む私たち一人一人も、イエス様は弟子たちを招いたように、共に過ぎ越しの食事をしようではないかと招かれています。主の招きに感謝し、そのパンと杯に与かりたいと思います。共に祈りましょう。

○祈り

イエス様は、私達に今日の聖書箇所から、人の思いをはるかに超えて、神様の救いがこの地上に実現することをお示くださいました。今私たちは、レントの時を過ごしています。イエス様が私たちの為に、罪の身代わりとなって十字架にかかって下さいました。そして、死に打ち勝たれたイエス様はイースターの朝に復活されました。どうしてイエス様が私たち

の為に十字架にかかれたのかということ、思いめぐらしながらこの一か月の時を過ごしています。

イエス様は十字架にかかれる前夜、12人の弟子を集めて過ぎ越しの食事を持たれました。神様が与えてくださった恵みと救いの導きが同じように私たちにも向けられています。イエス様は今日の聖書箇所を通して、私たちにもその食卓に共につきなさいと言われていきます。主の招きに感謝します。